

愛媛大学のオープンキャンパスの現状と方向性に関する一考察

—参加者のアンケート結果から見えてくるこれからのオープンキャンパス—

中村 裕行

愛媛大学四国地区国立大学連合アドミッションセンター

A Study on Open Campus of Ehime University's Current Situation and Direction

—Approach to the Future Open Campus from the Results of the Participants Questionnaire—

Hiroyuki NAKAMURA

Admission Center for Shikoku National Universities, Ehime University

1 はじめに

18歳人口の減少が危惧される中¹⁾、令和2年のコロナ禍により、令和2年度一般選抜からその対応の検討を迫られることになった。入試に加え、令和2年3月時点で本学の入試広報への影響が懸念された。本学の入試広報活動のうち、対面で実施をしているオープンキャンパス（以下、OCと表記）、業者主催の進学相談会への参加、高等学校に出向いての大学説明会・模擬授業等において、広報の充実による志願者確保と感染拡大防止の観点から実施方法の早急な検討が迫られた。令和3年度入試では、大学入学共通テストをはじめ、個別選抜においても変更点が多く、以前から本学でも周知をしてきたとは言え、実施年度での広報活動はかなり重要なものとなるのは必然なことである。その広報活動の中でも例年8月に実施しているOCでは入試の変更点等を説明する予定であったため、これをどう実施するかは重要なことである。これまで行ってきた本学のOCを見直し新たな方策を探る中で、多くの大学が検討していたオンラインによるOC（以下、Web型OCと表記）の実施を模索していった。本稿では、従来実施してきたOC（以下、従来型OCと表記）と昨年度と今年度を実施した対面を伴わないWeb型OCとを参加者から収集したアンケート結果をもとに比較し、本学OCの実態と方向性について考察する。

2 アンケートの概要

使用するアンケート結果は、事前申込者及び自由参加者で当日OCに参加した参加者から回答のあったもの（従来型OC）とWebによるアンケート回答（Web型OC）を使用し、回収状況は表1のとおりである。なお、従来型OCのアンケートは当日の資料とともに配付し、事前申込者は主に学部説明会場で、自由参加者は主に入試相談コーナー及び正門や西門で回収を行ったものである。一方、Web型OCは令和2年8月9日及び令和3年8月7日・8日に開催し、翌年の3月末日まで一部の情報が閲覧可能とされていたが、従来型OCと比較するため、サイト訪問者数は開催日当日のものとし、アンケートは開催日から開催月の月末までのおよそ3週間に収集したものである。

表1 アンケート回答者数

年度	参加者数	回答者数	回収率	種別
H26	2,832	1,859	65.64%	従来型 OC
H27	4,625	2,272	49.12%	
H28	4,336	2,011	46.38%	
H29	4,467	1,903	42.60%	
H30	4,468	2,470	55.28%	
R1	4,617	2,767	59.93%	Web型 OC
R2	(3,596)	361		
R3	(3,929)	327		

この表1の回答者数が本稿の各図表の母数となる。また、令和2年及び3年の参加者数欄の数字はWeb型OCのサ

イトのいずれかのページを訪問した数であり、同じ日に同一のIPアドレスからのものは1回とカウントしている。令和2年及び3年の回収率を算出していないのは参加者数とアンケート回答者の条件が異なるためである。

なお、ここでは従来型OCとWeb型OCのそれぞれのアンケート結果を区別して分析するものとする。

3 従来型オープンキャンパスの主な実施内容

本学で令和元年度まで実施していたOCの形式に変更されたのは平成18年度からのことである²⁾。当時の資料から、前年度まではOCと銘打ってはいたが、「体験入学」型で事前申込者のみが参加可能であった。しかし、高等学校での進路指導の一環で早期に大学訪問を奨励する流れが主流となり、結果的に多くの参加者の受け入れが可能な開催方法に変更されたのである。

【令和元年度の主なプログラム内容】

<事前申込が必要なプログラム>

- ・学部説明及び紹介、質疑応答
- ・模擬授業
- ・学部体験・体験実習
- ・先輩との交流

<事前申込不要のプログラム>

- ・展示・説明・相談コーナー
- ・入試相談コーナー
- ・学内施設見学（図書館、学生宿舎等）
- ・学生主催のイベント（サークル活動紹介等）

各学部で申し込み不要の説明会や相談に応じる場を設けたことで参加申込をしていない者でも参加できるようになったのである。

3.1 参加者の状況

平成18年度に見直しを行ってから、事前申込者に加え、事前申込をしない当日参加者がOCに参加するようになった。表1の参加者数では、従来型OCにおいて台風の接近による悪天候が予想された平成26年度³⁾を除き毎年4,000人を超える参加者である。見直し前の平成17年度には2,400人であったが、当日参加を認めることで参加者の増加につながり、イベントとしてのOCは大盛況となった。

図1は当日の参加者数の内訳である。事前申込者と自由参加者にはそれほど大きな変化がないのが分かる。

図2はアンケート回答者の内訳を比較したものだ。回答者数から無回答及びその他（中学生以下及び高校教員他）を除いたものである。毎年高校3年生よりも高校2年生が多いことが分かる。前述した平成18年度の見直し時点と傾向は変化しておらず、高等学校での指導で高校2年生のうちに大学等の高等教育機関を見学することを推奨してい

ることがうかがえる。また、近年の傾向として高校1年生や保護者の参加者が増加傾向にあるのも特徴的である。背景には平成21年3月に改訂された高等学校学習指導要領で「キャリア教育を推進すること」が進路指導の中に追加されたことがある。

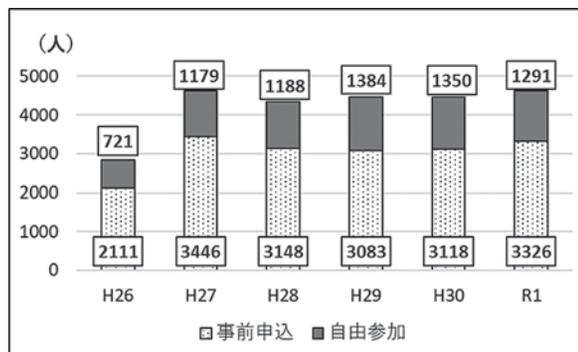


図1 従来型OC当日の参加者数の内訳⁴⁾

キャリア教育では、大学進学を目指す生徒に対しても大学への進学目的を明確化するため、教育課程全般で取り組む必要があった。そのため文部科学省はキャリア教育の手引を平成23年に作成したが、この中に体験的な学びの例として、大学のOCへの参加を挙げている。平成25年度入学生から正式に学年進行で実施されたが、高校生の前半段階で大学の様々な学部の魅力や特色を知ることは自らの進路を考える契機となるだろう。

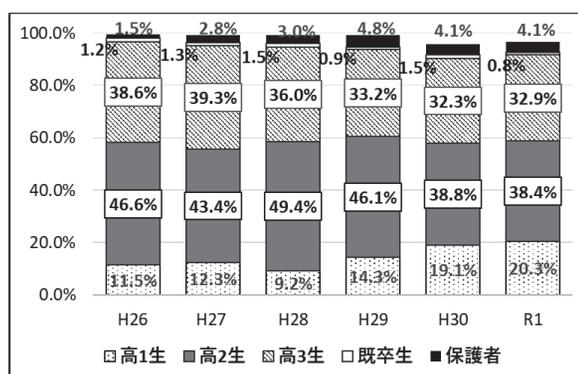


図2 従来型OCアンケート回答者の内訳⁵⁾

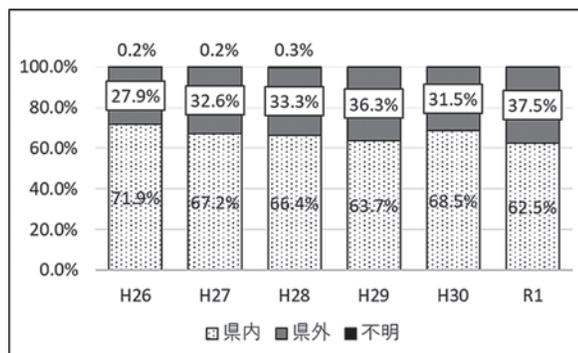


図3 従来型OC事前申込者及び自由参加者の学校所在地⁶⁾

図3は参加者が愛媛県内か、県外かを示したものである。平均して65%以上の参加者が愛媛県内を占めていることが分かる。距離的に近い点や文理系両方の学部が揃った総合大学であることが愛媛県内からの参加者が多い理由であろう。

またこの県内が多い理由には本学のOCの広報の仕方も影響している可能性がある。令和元年度まではホームページで周知の他、愛媛県内の高等学校にのみOCパンフレットを郵送していたからだ。

3.2 オープンキャンパスの広報と参加者の参加目的

図4に興味深いアンケート結果がある。参加者にOCを何で知ったかを尋ねたところ(複数回答可)、平成26年度には「学校の先生」と「本学のホームページ」が同じ割合であったが、年を経るにつれ、「本学のホームページ」の割合が「学校の先生」を上回っている。また県内の高等学校に郵送しているOCのパンフレットで高校生がOCを知る割合はそれほど高くない。OCの周知に限れば、高校生にはパンフレットの効果は薄いようだ。一方、多くの大学が自大学のホームページで様々な告知をしている実態が高校生に浸透していることを裏付ける結果でもある。

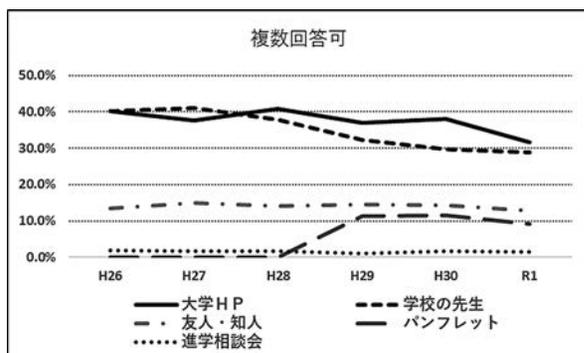


図4 従来型OCの開催を知った方法

図5はOCに参加した理由を尋ねたところ(複数回答可)、平成26年度を除き「本学を受験したい」よりも「大学を受験するための参考にした」が上回っている。この結果から具体的に進学したい大学が決まっていない段階で体験的にOCに参加して様々な情報を収集しようとする傾向がうかがえる。また、毎年一定数の参加者が「先生に勧められた」と回答していることは、「高校教員が進路指導を行う上で大学を模擬的・疑似的に体験できるOCを重視する」(秋山ほか, 2020)ことを裏付ける結果となっており、高等学校でOCの参加を推奨している表れでもある。

本学の選抜方法の変更に伴い、情報収集を目的とした参加も見逃せない一面である。平成28年度に法文学部、教育学部、農学部の改組に伴う変更、社会共創学部の新設などが予定されていたためであろうか、本稿の対象としている平成26年度から令和3年度までのOCで、その前年度

の平成27年度の参加者が最も多かった。募集単位の変更や選抜方法等の情報を得る目的もあったのだろうか。また社会共創学部は募集開始当初から選抜の評価資料として「活動報告書⁷⁾」を利用することを公表していたため、この説明を聞こうとする参加者もいたかもしれない。この「活動報告書」は志願者自身で記入する提出書類なので志願者となる参加者が直接説明を聞くのは有効なことであろう。もう一つ大きな変更が令和元年度の理学部と工学部の改組とスーパーサイエンス特別コースの募集停止であるが、医学部を除く理系学部の県内比率⁸⁾は高くないため、愛媛県内からの参加者が多い従来型OC平成30年度の参加者動向には影響が少なかった。ただAO入試や推薦入試⁹⁾を受験しようと考えている参加者にとって学部改組や選抜方法の変更などを知ることは関心が高いであろう。これはOCに参加してアドミッション・ポリシーを含めた入試に必要な情報を得よう高校教員から指導を受けているからではないか。実際「募集人員が比較的少なく、出願者数も絞られるAO・推薦入試では、アドミッション・ポリシーを踏まえた入試方法の導入が進んでいる」(西村ほか, 2018)ことを高校教員は認識しているのである。

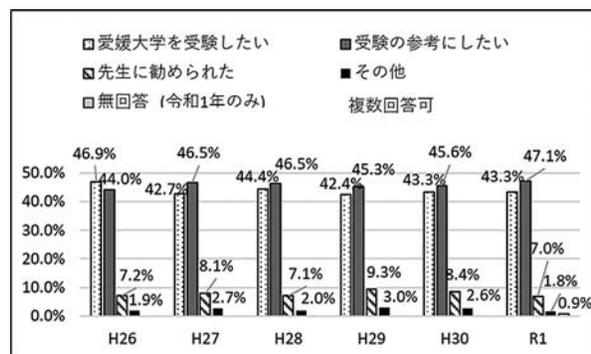


図5 従来型OCに参加した理由

3.3 プログラムの満足度

様々な参加目的を持つ参加者はOCのプログラムをどう評価しているのか。表2は各プログラムについて、「良かった・普通・良くなかった・不参加」の4つの選択肢から「良かった」と回答した集計結果を平均したものである。学科・

表2 プログラムの評価(従来型OC6年間の平均値)

プログラム	良かった
学科・課程等の概要説明(入試関係含む)	77.1%
模擬授業・実験・演習等	67.6%
研究室巡り、研究室見学	41.5%
各学部の紹介コーナー	43.7%
キャンパスツアー	23.2%
学生宿舎見学会 ※H28から4年間実施	10.0%
入試・学生生活・国際交流	19.7%
サークル紹介	19.2%

課程等の説明や入試情報を高く評価している。また、「模擬授業・実験・演習等」といった参加者自ら体験できるプログラムに対する評価も高い。

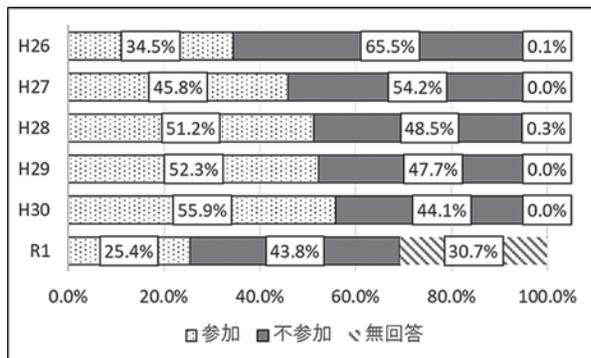


図6 従来型 OC における他大学 OC への参加状況

以前行っていた「体験入学」の頃はまさに入学前に体験的に大学の教育や研究内容を知る機会であった。当時から変化したことは、参加者に年齢的に近い在学生からの説明を含む大学生活に関する内容の紹介が増えたことだろう。

図6は本学以外の大学 OC への参加状況である。無回答の多い令和元年度を除くと、平成26年度から平成30年度まで他大学の OC への参加者割合が増加傾向にある。本学の情報だけではなく他大学の情報も収集することを目的に OC に参加している状況で、年々その傾向が顕著になっていることが明らかである。

4 Web 型オープンキャンパスの主な実施内容

それでは令和2年度及び令和3年度に実施した Web 型 OC についてみていきたい。Web 型 OC は従来型の代替手段として企画し実施したものではあるが、結果的に従来型と異なる点もあった。その一例が開催時期である。従来型は例年前期の授業が終了する8月上旬の2日間で開催していたが、Web 型 OC は冒頭にも記したように翌年の3月末まで一部のプログラムが閲覧可能であった。

【令和2年度の主なプログラム内容】

<令和3年3月まで閲覧可能だったプログラム>

- ・ 学部紹介
 学科紹介, 授業紹介, 研究紹介, 入試説明, 進路・就職状況, 取得できる資格等
- ・ 愛媛大学が選ばれる3つの理由
- ・ 大学紹介・施設紹介
- ・ 既存の本学ホームページへのリンク

Web 上での開催のため、ホームページ内にある既存の情報を有効に活用した。Web 型 OC として特設ページにメニューを整理し、そこから各ページにアクセスしやすくした。この他、高校生や保護者から受けた質問を Q&A と

して掲載したり（法文学部）、事前登録フォームからの質問に回答したり（医学部）、入試問題対策の解説を当日限定の企画としたり（工学部）して、各学部が従来型 OC で行っていた内容を Web 上でも実施できるよう工夫をしていた。また従来型 OC に近づけイベント性を高めるために、各学部や学内案内等のライブ配信を多数行った。

「愛媛大学が選ばれる3つの理由」というのは Web 型 OC 開催以前の令和元年発行分の全学ガイドブックから本学のアピールポイントを3つに絞り分かりやすくまとめたものである。

4.1 Web サイトを訪問した者の変化

Web 型 OC は従来型 OC に比べアンケートの回答者数は少ないが、閲覧後に回答してくれた貴重なデータである。2年分ではあるが、このデータを分析して今後の OC に役立てたい。

図7は従来型同様、無回答及びその他（中学生以下及び高校教員他）を除いた Web 型 OC のアンケート回答者の内訳だが、令和2年度と令和3年度を比較しても大きな変化はない。特徴的なのは高校3年生が最も多いことだ。従来型 OC では高校2年生の方が多く、高校1年生も増加傾向であったことは異なる傾向である。

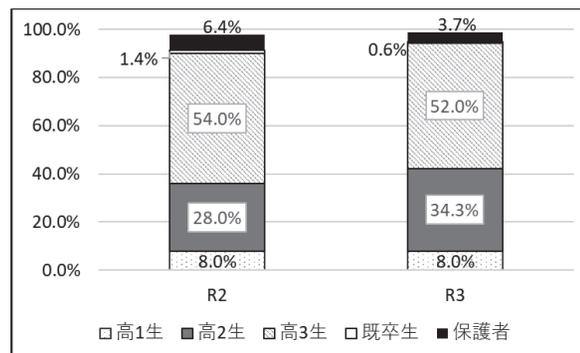


図7 Web 型 OC アンケート回答者の内訳

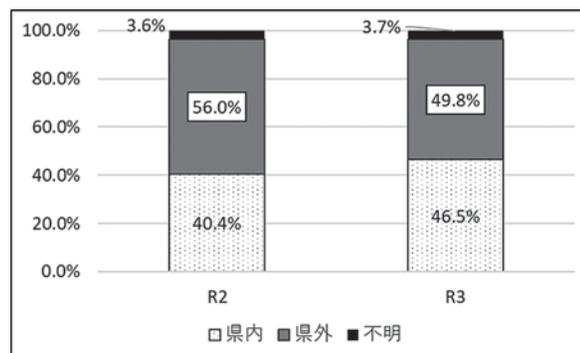


図8 Web 型 OC アンケート回答者の学校所在地

また、図8から県内からの参加者よりも県外の参加者が多い。この点も従来型 OC とは異なる結果となっている。従来型 OC では県内からの参加者が7割から6割で推移し

ていたが、Web型OCでは県外の参加者がおよそ5割まで増えている。Web開催で従来型とは異なる地域からの参加も期待していた。令和2年度には突然のコロナ禍によって進学情報を得る機会を失った高校生を中心に県外からの参加者が増え、令和3年度もこの傾向が続いている。長引くコロナ禍によりWeb型OCの開催が一般的になってきたことも少なからず影響しているであろう。Web開催に変わったことにより、従来型のOCでは参加者数が増えなかった県外の地域から広く参加者を集められるようになった効果は大きい。

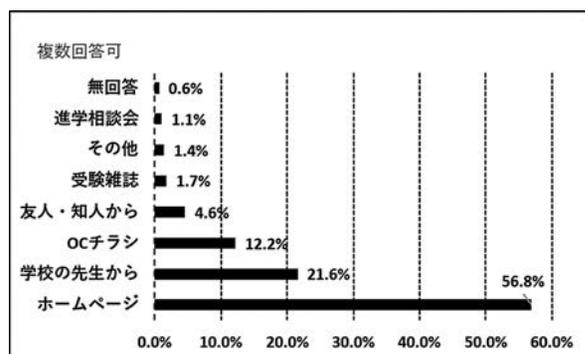


図9 Web型OCの開催を知った方法¹⁰⁾

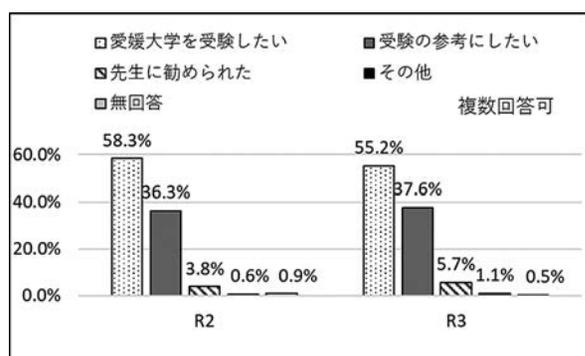


図10 Web型OCに参加した理由

図9のWeb型OCの開催を知った方法ではWeb開催であるためか、「ホームページ」から開催の情報を知った割合が最も高い。従来型OCの図4では「ホームページ」と「学校の先生から」で知った割合が多かったものの下降傾向であったが、Web型OCでは2年間の合計値であるが、「ホームページ」が「学校の先生から」の倍以上の割合となっている。コロナ禍でいかにインターネットを通じた情報提供が重要であったかを示すものである。

令和2年度の内閣府調査¹¹⁾では高校生全体の98.9%がインターネットを利用している状況が分かっており、高校生の実態を反映した結果である。しかしここで注意しなければならないのはどのようなデバイスで利用しているかである。令和2年度実施のWeb型OC当日のアクセス記録から算出したデータに着目したい。このアクセスではス

マートフォン利用が全体の72.5%を占める点だ。先の内閣府調査にも「高校生の95.2%がスマートフォンを利用している」とあり、この現状を意識したOCの広報が必要である。

Web型OCに参加した理由を集計した図10では、従来型OCの図5に比べ、「本学を受験したい」と回答した割合が「受験の参考にした」よりも高く、5割を超えている。前述したが、コロナ禍により進学情報を得る機会を失ってしまった高校生にとってWeb型OCへの参加で受験志望先を決めていこうという意識の表れではないか。また「先生に勧められた」が一定数いた従来型に比べかなり減少しているのはコロナ禍におけるオンライン授業や短縮授業などの措置により教員と生徒との対話の機会が減少した可能性も背景にあるのではないだろうか。

4.2 プログラムに対する評価

プログラム全体を「とても良かった・良かった・良くなかった・とても良くなかった」の4件法で評価を求めた結果、「とても良かった・良かった」と評価したのは、令和2年度99.1%、令和3年度99.6%と非常に高い結果であった。また今後のOCを検討する上で必要と考えられるWeb型OCのサイト構成に関する質問項目に対し「とてもそう思う・そう思う・そう思わない・全く思わない」の4件法で回答を求めた結果が表3のとおりである。ここで着目したいのは「必要な情報が十分に提供されていた」や「サイトの構成が見やすかった」の評価である。これらの評価が高いのはWeb型OCでの情報提供には重要な点である。また、質問項目5の「いつでも閲覧できるようにしてほしい」は初めてWeb型OCを開催した令和2年度のみ質問項目であるが、Webで公開した内容をいつまで閲覧できるようにしておくかを定めるうえで非常に参考となる回答であった。

表3 プログラム及びWebサイトの評価の平均値

質問項目	とてもそう思う そう思う
1) 必要な情報が十分に提供されていた	91.1%
2) サイトの構成が見やすかった	89.7%
3) 本サイトを見て良かった	92.3%
4) 開催の時期は適当だった ※ R3のみの質問項目	92.0%
5) いつでも閲覧できるようにしてほしい ※ R2のみの質問項目	91.1%

図11はWeb型OCで他大学OCへの参加状況を調査した結果である。回答者の参加した他大学のOCがWebなのか従来型なのかの区別はできないが、平成30年度までに増加傾向であった他大学OCへの参加傾向が加速していることが分かる。コロナ禍により進学情報を得にくい状

況であること、その状況からでも情報を得ようとする参加者の動向がうかがえる。他大学 OC の良かった点を個々に見てみると、「直接質問に答えてくれた」や「在学生の声が聞けた」等のコメントが複数見られた。既存の情報だけではなく参加者と大学関係者との双方向のやり取りで得られる情報や学生発信の情報等に評価が高い傾向にある。また「複数回の実施で自分の空いている時間に参加できた」とのコメントもあり、表3の質問項目5との関連からも Web 型で開催する場合には開催方法に工夫が必要であることが確認できた。

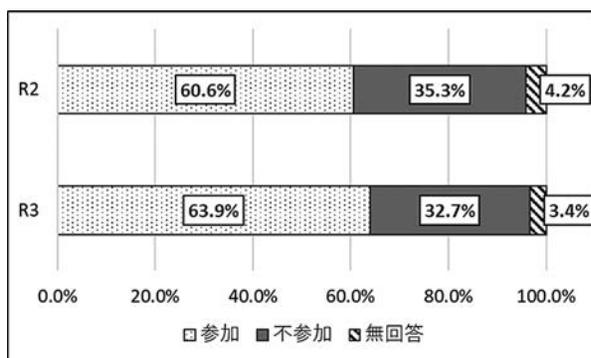


図 11 Web 型 OC における他大学 OC への参加状況

本学の Web 型 OC 全体に関する意見欄のコメントでも概ね肯定的な意見が多かったが、中にはホームページから簡単に探し出せない内容や研究に関する詳細な説明等を知りたいとの要望もあり、今後の Web 型 OC の開催に向け検討すべき課題も見られた。

5 考 察

従来型 OC と Web 型 OC でのアンケート結果をみてきた。開催方法に違いはあるが、愛媛大学の OC に参加した主に高校生の 8 年間の状況でもある。従来型のアンケートで明らかになったように参加する高校生の目的は受験のための情報収集よりも進路学習の一環として大学を知ることが勝っていた。しかし、Web 型では「本学を受験したい」が「受験の参考にした」を上回り、受験を想定した参加者が多くなっていた。従来型でも Web 型でも本学の「ホームページ」で OC の開催情報を得ている割合が高いことから、OC の参加者は本学に関心を持った集団であるに違いない。参加目的は異なっても OC への参加を契機に大学情報を知る機会になっている。また従来型では参加者の傾向は県内が多かったが、Web 型では県外からの参加者が多く、Web 型を活用して県外からの参加者を増やしていく可能性を感じた。三好 (2021) も同様の分析をしており他大学でも同様の結果であることがうかがえる。

令和 2 年度の Web 型 OC でサイトオープンからクロー

ズまで 18,594 件のアクセスがあった¹²⁾。開催月の 8 月に最も多い 10,198 件のアクセスだったが、その後翌年の 3 月末まで毎月一定程度のアクセスがあった。この結果はコロナ禍でのことなので今後の検証は必要だが、Web 型 OC 開催が高校生にとって大学情報の入り口として果たす役割は大きい。

コロナ禍が収束しても従来型だけではなく Web 開催を維持することは参加者数を増やし、本学に関する情報を広く県内外に伝えるために必要な取り組みである。従来型だけでは県外からの多くの参加もそれほど見込めず、参加者がいつでも情報収集できるような環境の維持もできない。Web 型の継続は突然のコロナ禍によってもたらされた OC の参加形態の変化ではあるが、入試広報における OC の在り方を見直す機会となっているのである。

ではどのように 2 つの OC を開催していくべきであろうか。従来型と Web 型それぞれのメリットを活かした内容を企画すべきであろう。従来型では直接大学を訪問するメリットを活かし、体験的なプログラムや学生との交流等を中心に計画し、大学の雰囲気や環境面等を前面に押し出す内容が参加者にとって魅力的であろう。直接本学を訪れてみなければ感じられない雰囲気やキャンパス全体の様子などは大学進学を検討する上で大きな要素に違いない。一方 Web 型では全学に関わる情報から学部紹介や模擬授業、入試に関する情報等、参加者が求める情報を必要な時に提供できる。参加者がアクセスしやすい環境を整えることで参加者個々のニーズに対応することができるであろう。また、ホームページでは告知をタイムリーに行い、告知のページでは参加者の興味関心を引くような魅力的な構成とすべきであろう。一方、参加者自身が学びたい内容をじっくりと調べることができるのも Web 型のメリットであると言えよう。

ここで入試広報全体としてさらに発展させたいのは参加者が求める情報の先にある本学の魅力にどのようにアクセスしてもらうかである。Web 型 OC で大学ホームページにある情報を探しやすいだけではなく、一次的に知り得た情報から興味関心のある研究分野等に誘導する方策である。大学での研究内容に触れることができるのは、ある意味では高大連携の取り組みに似ている。通常の高大連携では特定の高等学校と大学との連携になるが、研究内容や模擬授業を研究系統別に探し出せるような仕組みを作れば、どこの高等学校でも本学の持つ情報にアクセスできる状態となる。その点では高大連携の仕組みの一つとも言えるのではないかと。高校生が大学の研究分野や教育内容にアクセスできる仕組みを構築することは、令和 4 年度から高等学校で本格導入される総合的な探求の時間でも役に立つ仕組みであると言えよう。高等学校学習指導要領解説では、総合的な探求の時間を充実させるための体制づくりとして、外部との連携の構築を挙げている。全ての高等学校

で実施する取り組みに大学が個々に対応していくのは難しいが、大学側で研究内容や教育内容にアクセスできる仕組みを作ることで多くの高等学校での利用が可能となるだろう。また総合的な探求の時間では生徒の立てる課題の背景に「課題を将来の職業選択や進路実現に直接結びつけて自己の在り方生き方を模索していくようになる」ことも想定されている。探究活動の中に自己の進路実現につながるような活動が含まれることになる。本学をより良く知る仕組みを本学ホームページ内に構築することは、高校生にとって広く活用可能な高大連携の役割を果たすことが可能なのではないか。

昨年本学で受験生向けの情報を一元化する受験情報サイトを作成した。これは広報室とアドミッションセンターで協働して行ったのだが、大学広報の観点と入試広報の観点を融合させたものだと言える。このサイトは「入試」「学びと研究」「大学生活」「進路」の4つのカテゴリーに分かれているのだが、受験生からすると本学に入学してから卒業するまでをイメージしやすいものとなっている。この受験情報サイトで扱う情報は全学のガイドブックやホームページの掲載内容が主となっている。これは一例であるが、入試広報を単なる入試情報の提供の場としてではなく、もっと多様な情報提供の場とするような取り組みは今後さらに必要となるに違いない。

6 おわりに

地方国立大学である本学にとって18歳人口の減少は入学者確保の観点からも切実な問題であり、その問題解決の一つの方策が入試広報の充実であると言えるだろう。だからこそOCでは本学への関心を高めてもらう仕組みを構築していく必要がある。OCはあくまで入試広報の一つの手段であり、他の大学広報と一体的に捉え戦略的なものに変えていかなければならない。本学への入学を志望する者にとって大学の情報は分かりやすく入手しやすいものでなければならない。情報を知ることから活用することまで幅広い需要に応じることが今後の本学の入試広報を含めた広報活動で重要となると確信している。

注

- 1) 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)(中教審第211号)参考資料集【18歳人口の減少を踏まえた高等教育機関の規模や地域配置 関係資料1】https://www.mext.go.jp/content/1413715_013.pdf(令和3年8月18日閲覧)
- 2) 当時、愛媛大学では、高大連携委員会でオープンキャンパスの実施に関して検討されていた。
- 3) 平成26年度の開催日である8月7日及び8日は沖縄付近の台風11号の影響により風雨の強い天気であった。
気象庁 日々の天気図 No.151 2014年8月 <https://www.data.jma.go.jp/fcd/yoho/data/hibiten/2014/1408.pdf>(令和3年8月23日閲覧)

- 4) 事前申込は事前に申し込みをして当日参加した者、自由参加は当日参加でアンケートに回答した者の人数である。
- 5) アンケート回答者とは、事前申込者及び自由参加者でアンケートに回答した人数の集計である。
- 6) 事前申込者、自由参加者ともアンケート回答からの集計による。また平成29年度から回答時に学校所在地の回答を必須としたため、不明は解消されている。
- 7) 社会共創学部の実験型選抜で課している活動報告書とは、「意欲的に取り組んだ活動」、「課題研究」、「資格・検定等」の3種類で、これらのうちから1種類以上を提出するものである。
- 8) 令和元年度入学者の理系学部の県内比率は、理学部23.9%・医学部53.8%・工学部32.6%・農学部33.5%である。
- 9) 令和3年度入試以降、AO入試を総合型選抜、推薦入試を学校推薦型選抜と名称変更された。
- 10) 令和2年度と令和3年度のアンケート結果を合算したものである。
- 11) 内閣府令和2年度青少年のインターネット利用環境実態調査 <https://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/r02/net-jittai/pdf/2-1-1.pdf>(令和3年9月6日閲覧)
- 12) 2020Webオープンキャンパス特設サイト訪問者数集計。これはサイト内のいずれかのページにアクセスした数である。

参考文献

- 高等学校学習指導要領(平成21年3月)文部科学省
高等学校キャリア教育の手引き(平成23年11月)文部科学省
秋山英治・仲道雅輝・入野和朗・神智彦・山本恭子(2020)「大学広報に関する高校教員の意識」『大学教育実践ジャーナル』18, 75-84
井上敏憲・中村裕行・前村哲史・植野美彦・立岡裕士・岡本崇宅・大塚智子(2017)「四国地区国立5大学共通のインターネット出願と多面的・総合的評価への取り組み」『大学入試研究ジャーナル』27, 91-96
西村公・井上敏憲・中村裕行(2018)「アドミッション・ポリシーの認知状況から見えるもの」『大学入試研究ジャーナル』28, 93-98
三好登(2021)「COVID-19禍における高校生の進路希望の変化に与えるオンラインオープンキャンパスの効果研究」『令和3年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会(第16回)研究発表予稿集(オープンセッション用)』71-78
高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探求の時間編(平成30年7月)文部科学省
愛媛大学 Webオープンキャンパス2021
<https://oc.adc.ehime-u.ac.jp/>(令和3年10月1日閲覧)
愛媛大学受験情報サイト
<https://juken.ehime-u.ac.jp/>(令和3年10月1日閲覧)

